

特別支援教育における連携

早期発見・早期支援

- 発達障害に効果のある支援は、定型発達にも効果あり
- 障害の有無にかかわらず、出来ることはしてみる
- 早期支援は将来の就学・就労時の問題発生を軽減する
- 早期発見・支援には、家庭との連携は不可欠

家庭との連携

- 親を説き伏せるのではなく、親と教育機関が「共通の理解」を持つことを目標に
- 子どもが「できること」に焦点を置くことを優先する
- ポジティブであることはよいが、楽観的な見かた（「大丈夫…」など）は要注意
- 現在の問題だけでなく、子どもの将来を見据えた支援につなげていく
- 親を支援スタッフの一員として加えることで、環境間での支援の一貫性をはかる

一貫した支援体制

- 学校と家庭で同様の支援となるようにする



異なる環境でも共通した支援体制は、子どもが獲得したスキルの維持、般化を促進する

- 幼稚園・保育園でうまくいっていた支援法は、小学校でも有効的(もちろん、さらにその先でも)



有効な支援スタイルを子どもの発達・進学に合わせて調整していく

アセスメント

- 支援を始める前のアセスメントは、学習・行動特性を包括的に把握するため
- アセスメントの結果は何に使われるか？
 - ・ 支援手段を考える
 - ・ 支援状態をモニターする
 - ・ 必要に応じて支援法を調整・変更する



つまり、アセスメントは支援プロセスのすべてにおいて実施される

検査からのアセスメント・データ

- 診断・スクリーニングテスト(ADI-R、ADOS、Conners 3、PARS-TRなど)
- 知能検査(WISC-IV、WAIS-III、新版K式発達検査、田中ビネー知能検査Vなど)
- その他の標準化検査(Vineland-II、感覚プロファイル、CBCL子どもの行動チェックリストなど)
- 学校や他機関でのテスト(单元ごとのテストなど)

現場からのアセスメント・データ

- 観察
 - ・ 記述式データ収集
 - ・ 計画的データ収集(頻度、時間、その他)
- インタビュー
 - ・ インフォーマル形式
 - ・ 質問形式
- 記録
 - ・ 生育歴
 - ・ 福祉・教育機関の記録
 - ・ ノート、プリント、宿題

アセスメント結果をまとめるポイント

- 誰が読んでも同一の理解が得られるもの
- 主観的な記述のみで終わらず、できる限り、測定可能なデータを添えること
- 観察可能な言葉をなるべく使う
(×)きちんと活動に参加する、ちゃんと座る、など
(○)席を離れない、発言時には手を上げる、など
- よくまとめられたデータは、支援機関相互の「共通認識」への橋渡しとなる

他職種が集まるケース会議では…

- お互いの立場を尊重する
- できる限り、保護者の参加が望ましい
- 環境や教育システムは違っても、一人一人の子どもに対し、「同じ目標」で支援をしていく
- 自分の「業界」の言葉・常識で会話しない
- ケース会議での協議ポイント
 - ・ 子どもが得意なもの・出来るもの
 - ・ 子どもが苦手なもの
 - ・ 現在行っている支援とその経過
 - ・ 家庭との連携状態
